



『明治前日本数学史』全5巻

日本学士院日本科学史刊行会編（1954~56）


明治以前の日本の数学は「和算」と呼ばれています。中国数学を起源とし、江戸時代を通じて独特の発展を遂げた数学です。

和算が広まった契機には、まず吉田光由(1598-1672)の『塵劫記(じんこうき)』(1627)という、様々な種類の計算を扱った教科書が挙げられます。これが出版されると大ヒット・ベストセラーとなり、多くの版を重ね、新しい問題を出すたびに、各地に数学愛好者を生みました。その後、関孝和(?-1708)が現れて大きな業績を残し、弟子たちが明治初期に至るまで成果を発展させました。

時が明治に移ると、近代化を急いだ明治政府は学校教育に西洋数学を採用し、独自の発展を遂げてきた和算は、急速に衰退することになりました。

さて、本学数学科は設置当初から和算史研究の中心地でした。林鶴一教授が「東北数学雑誌」の中で、和算に関する論文を毎号発表し、藤原松三郎教授が林教授の跡を引き継ぐ形で和算史の集大成を志し、その研究が、本人たちの死去後に『明治前日本数学史』として刊行されました。

林・藤原両教授は数多くの和算資料だけでなく、中国数学の資料の収集にも力を入れました。その膨大な資料は今も本学図書館に保存されています。





(東北大学史料館写真 DB より)

【林 鶴一】 はやし・つるいち (1873-1935)

徳島市に生まれる。1897年東京帝国大学理科大学数学科を卒業した。京都帝国大学理工科大学助教授等を経て、1911年4月東北帝国大学数学科教授となり、創立当時の東北大学の基礎を固めるのに功績があった。日本最初の数学専門の学術誌（『東北数学雑誌』）の発行により数学界に大きな刺激を与えたことや、関孝和の「解伏題之法（かいふくだいのほう）」が行列式の理論を含んでいることの発見など和算の研究で知られている。

[参考：日本大百科全書]



(東北大学史料館写真 DB より)

【藤原 松三郎】 ふじわら・まつさぶろう (1881-1946)

三重県に生まれる。1905年東京帝国大学理科大学数学科を卒業した。旧制第一高等学校教授を経て、1911年東北帝国大学数学科教授となる。林鶴一とともに「東北数学雑誌」を刊行。解析学の論文がおおく、晩年は和算を研究して「明治前日本数学史」を著した。

[参考：日本人名大辞典]